人生に生かせ 駿台の普段力

「愛情教育」を建学の精神に、児童・生徒の「チャレンジング・スピリット」を育む駿台甲府高校・中学校（八田政久校長）、駿台甲府小学校（坂本宏行校長）。教師同士の強固な連携と独自の発想、学校を挙げた応援体制は、児童・生徒にさまざまなチャンスの場を広げている。「普段力」を身に付け、「やる時はやる駿台生」を後押し、さらなる飛躍を応援している。

チェロなど一流の音楽レクチャー

12年見据えた指導に尽力

依田秀樹教諭（左）の指導の下、音楽祭に向けた練習に励む合唱部

「いい感じ！その調子で」

駿台甲府小1年の担任で、駿小合唱クラブ顧問の依田秀樹教諭の言葉に、合唱する児童たちの頬が紅潮、一層滑らかな歌い声が音楽室に響いた。3月6日に甲府・コラニー文化ホールで開かれる「第2回駿小音楽祭」に向けた練習の一こま。児童たちの生き生きとした表情が広がった。

依田教諭は、チェリストとして大阪国際音楽コンクール弦楽器部門で入選、海外音楽大学マスタークラス派遣助成オーディションにも準合格した実力派。一方で、高校時代はバスケットボール部にも所属し、関東大会に出場したスポーツマンでもある。

「音楽もスポーツも勉強も、毎日の積み重ねが大切です。その過程で、たとえ間違っていることがあっても頭ごなしに否定せず、まずは受け入れる。子どもたち自身に考えさせ、コミュニケーションを取りながら導く指導を心掛けています」

教師だった父親の後ろ姿に憧れて教師の道へ。一線を退いた父の元へ、今も当時の教え子から便りが届き続けることへの驚きとともに、人を育てることへの魅力を感じたという。

教師の道へ進んで4年。「大学時代の仲間で同じ教職に就いた友人たちからは、1年生ながら落ち着いた学級運営ができていることをうらやましがられます」と笑顔を見せる。決しておとなしすぎる児童たちというわけではない。授業と休み時間などのメリハリがついているということだという。

現在は低学年をみているが、音楽の授業では担当学年によって内容を精査。作曲家にまつわる小話を紹介するなど、教科書には出てこないようなオリジナリティーあふれる授業を工夫してきた。さらに、自らチェロを弾いて聞かせたり、大学時代などの人脈を生かしてピアノ五重奏の生演奏を聴かせたりと教師としてさまざまなチャレンジもしている。

「駿小の教壇に立って感じているのは、小中高12年間を見据えた教育、指導の大切さ。学びの基本となる小学校時代から勉強、学ぶことの楽しさ、素晴らしさなど本来の意味を伝えていきたいと考えています」と依田教諭は話す。一方で、同じ学年を担任しても、年によってカラーが違うことを目の当たりにしたことも。「一度成功したからといって次も成功するとは限りません。常に教師も学びと研究が大切と感じています」

単に勉強ができる子どもを育むのではなく、社会に通用する子どもたちを育てたい―。「子どもたちとともに教育者としての自分自身も成長できるよう、全力で子どもたちに向き合っていきたいと考えています」

実践的な英語教育を

駿小・坂本校長に聞く

就任2年目の坂本宏行駿台甲府小校長に教育方針などを聞いた。

―教育方針は。

「『たっぷり』の授業時間数を確保し、『ゆっくり』と学びを深めさせる。体験学習を重視し、読み書き計算を中心にした基礎基本を『しっかり』と指導することです。基礎学力はもちろん、自分で考え、判断できる力や思いやりの心などを身に付けた豊かな人間力を育むことを目指しています」

―十分な授業時数を確保しているようですね。

「1年生から6時間授業で、週30時間を確保。6年間では公立小より625時間多いことになります。学力に合わせた個別指導や4年生からは週2回の課外授業も行っています。度々変わる学習指導要領の一番の問題点は、小学校でのつまずきが解消されないまま中学、高校と進むほどに大きなひずみにつながってしまうということです。そうならないための努力は惜しみません」

―本年度を振り返って。

「グローバル教育の一環と考えた英語教育、ICT（情報通信技術）教育もほぼ予定通り、順調に推移したと考えています。英語教育は開校当時から取り入れてきましたが、より実践的な場面を増やしています。一方で、英語は話せても日本語で説明がつかなくては意味がなく、国語力の向上にも力を注いでいます」

放課後のクラブ活動でアドバイスする坂本宏行校長（左）

―新年度の取り組みは。

「さらなる英語教育の充実を図っていきます。2月下旬には、休み時間や昼休みにネイティブの先生たちと英会話などを楽しめる『イングリッシュセンター』を開設しました。より成果が出るプログラムづくりを目指し、県内外の先進校を視察。今後は県外校との連携を視野に進めています」

―坂本校長は早実高野球部で活躍したそうですね。児童たちの体力向上について。

「勉強を含めて何事においても体が資本です。年4回の『スポーツデー』を企画・実施しています。4色の縦割り活動で駅伝やジャンボカルタ大会などで競い、年間通した総合優勝を目指すものです。体力の向上はもちろん、コミュニケーションづくりにも一役買っています。新年度はより一層充実した内容を考えたいと思っています」

熱い教師陣、こだわり教育

文理合同高習熟度クラスをリード

「本質」伝えて挑戦心育む

大学入試を前に3年生の質問に応える羽田昌樹教諭（右）

「駿台生の魅力は、いつの時代も何事にも一生懸命に取り組んでいることです」。県内公立高出身で、高校時代に憧れていた駿台甲府中高の教師となって15年を迎えた羽田昌樹教諭は目を細める。

数学の教師として駿台甲府中で4年間指導に当たり、現在は駿台甲府高の教壇に立つ。本年度は、情熱ある指導で難関国公立大や国公立大医学部などを目指す3年の「文理合同高習熟度クラス」を率いてきた。

「勉強はもちろん、部活も駿高祭（学園祭）も、何事にも一生懸命に取り組む生徒たちの背景にあるのが教師たちの熱意とこだわりであると考えます。駿台の教師は、入職前までに自分が思っていた教師像と良い意味で違っていました」

「生徒に寄り添い、自主性を育みながらも、ここぞという時には『おれ（私）についてこい！』といったくましさも感じました」。格好の良さも悪さも見せてくれるベテラン教師から、駿台精神のノウハウを学んだ。目指す教師像があることは心強く、「ベテランと若手教師が見事に融合できていると自負しています」とその体制に胸を張る。

羽田教諭の指導の根幹は、受験のためだけの勉強ではなく、「本質」を教えるということ。それを学んだのが、入職して最初に組んだ同じ数学教師で、現在は駿台甲府小の内藤真一副校長だ。

「本質を伝えるには自分自身も学び、理解しなければなりません。一方、生徒にとっては本質を知ることで、根付いた知識は高校にとどまらず大学、さらにはその先の人生でも生きる。内藤先生には、自分の甘さを気付かせてもらい、数学に対する考え方、教えるということの意味や心構えなど多くのことを教えてもらいました」と羽田教諭。「（内藤先生は）教師が魅力を感じるほどの先生。生徒が魅力を感じるのは当然で、支持が厚いのもうなずけます。私もそんな教師になりたいと考えています」

指導要領の改定、大学入試制度など生徒たちを取り巻く環境は目まぐるしく変わっている。「昨年と比較しても今年の受験制度は違っています。東京大学に推薦制度ができるとは夢にも思っていませんでしたし、センター試験がなくなるとも数年前は考えもしませんでした」

一方で、これら受験体制の変化への瞬時の対応は不可欠で、駿高は駿台予備学校（東京）との連携を一層強化している。「最先端の情報を収集・発信、指導に生かすなど、生徒たちの目標を達成させるための体制づくりに余念はありません」と話す。

学校生活は勉強だけではなく、友達と衝突もあれば、喜びを分かち合ったことも数知れない。きょう3日、駿高を巣立つ教え子たちに向け羽田教諭は「これからも信念を貫いていってほしいですね。長い人生、失敗もあるだろうがその先には成長がある。チャレンジングあるのみです。チャレンジング・スピリットを忘れず、何事にも挑戦し続けてほしい」と呼び掛けた。

科学や海外学習強化

駿高・八田校長に聞く

八田政久校長

昨年4月に就任した八田政久駿台甲府中高校長に一年を振り返るとともに、新年度に向けた教育ビジョンなどを聞いた。

―一年を振り返って。

「学校独自の考えで動けるのが私学の良さ。ブレない教育を大切にしてきました。時代に乗り遅れない教育はもちろん大切ですが、受験だけではないその先の人生をも考えた教育を目指しています」

―2020年には新たな大学入試制度が始まりますね。

「現在の中学1年生から対象となります。重視されるのが思考力や判断力、表現力など。付け焼き刃では対応できない内容です。課題発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ力を身につけさせる意味でも、日ごろから各種体験を通して育んでいく必要があり、活動の場を増やしています」

―各分野で活躍する卒業生の講演もその一つですね。

「文化講演会（PTA主催）では、農業生産法人『サラダボウル』社長の田中進さんのお話を聞きました。農業に端を発し、地産地消はもとより発想は科学・IT分野にまで広がり、山梨にいながら世界とつながっているなど格好の手本。文部科学省で働くOBにも話をしてもらいました」

―新年度の取り組みは。

「国際バカロレアの申請校となり、認定に向けての取り組みを強化するとともに、文科省の『スーパーグローバルハイスクール（SGH）』や『スーパーサイエンスハイスクール（SSH）』の指定に向けた研究も進めていきます。昨年の中学3年生に続いて、3月には高校2年の希望者を対象に海外への語学研修を再開。高校1年生の研修旅行でも海外コースを増やすなど、海外経験の場を増やしていきます」

―駿台予備学校との連携も一層強化するそうですね。

「従来の連携に加え、予備学校のウェブシステムを使った個別指導にも乗り出します。学校にいながらにして難関国公立大や医学部の学生たちから定期的に個別指導が受けられるもので、最先端の学びが受けられます」

―クラブ活動も盛んですね。

「全国高校選抜へテニス部男子が初出場を決めたほか、ハンドボール男子も4年連続で出場権を獲得。室内楽同好会は全国高校総合文化祭への出場を決めているなど明るいニュースがあります。最近は、サッカー部も県内大会でベスト8に度々名を連ね、野球や陸上なども頑張っていて、まさに文武共存。さらなるボトムアップを目指していきます」

中駿「山梨学」生徒に充実感

新たな学力観養成へ

課題研究を通じ、新たな学力観を育む―。駿台甲府中は本年度、2020年度から始まる新大学入試制度を見据えた取り組みに着手。課題研究などを通じて、生徒たちの「思考力」「判断力」「表現力」といった学力観とともに、「協働性」も育んでいる。

年間を通して個人で行う「課題研究」は放課後を活動のベースに、学年ごとにテーマを設けて班に分かれて取り組む「グループ学習」と「コミュニケーション活動」は、土曜日に行う体験型学習のチャレンジ・サタデー（CS）で実施＝写真。駿高生の協力も仰ぐなど、中高連携の要素も織り交ぜ、求められるプレゼンテーション能力の養成などに力を注いでいる。

1年生のグループ学習では「山梨学」をテーマに1班6人の24班に分かれて研究。秋には班ごとに行き先を決めて訪れる"県内探訪"も実施してきた。一方で、教師たちは生徒たちの探訪に先立ち、個々に県内を巡って生徒たちの前でプレゼン。身をもって活動方法を示してきたという。

学年主任の中村圭世教諭は「生徒たちに行動計画表を出させ、本部への連絡は徹底させましたが、大切にしたのは想定外の状況にも臨機応変に行動し、無事に帰ってくること。到着場所に戻ってきた時の生徒たちの表情はみんな生き生きとしていて収穫の多さを実感しました」と目を細めた。

行き先は北杜市や都留市、甲府市、身延町、峡東方面などさまざま。道に迷ったり、電車に乗り遅れたり、仲間とはぐれたりと計画通りにいかないこともあったが、生徒たちは「人生の中で最高の木曜日でした」「自分たちの手で生きた知識や経験をつかんだ一日でした」と充実感にあふれていた。

また、「一番心に残ったのが人の優しさ」「調査や計画など）たくさん苦労した分、楽しいことが待っていて、仲間と協力する大切さや、目的を達成することで得るものの大きさを実感しました」「社会の価値にとらわれず、自分の目で見て、足を使い、その場所の良さを見つけることが大切だと思いました」と生徒たちは収穫を口にした。

中村教諭は「当たり前に思い、見過ごしがちな山梨の魅力を発見できたことは大きな成果。足元を固め、今度は順次、視野をグローバルに広げ、さらなる気付きにつなげていきたいと考えています」と話している。

〈企画・制作〉山梨日日新聞社広告局

第2回 駿小音楽祭

平成28年 3月6日（日） 入場無料

会場 甲府・コラニー文化ホール（小ホール）

13時30分 開場／14時 開演

【出演】吹奏楽クラブ・合唱クラブ　【ゲスト出演】駿台甲府中学校吹奏楽部・合唱部　駿台甲府高等学校室内楽同好会

駿台甲府小学校　〒400-0845 甲府市上今井町884-1　http://www.sundai-kofu.ed.jp/elementary/

〈お問い合わせ〉TEL:055(244)0411　FAX:055(220)2838（担当:依田）

イラスト、タイトルカット／大塚えみり（駿台甲府高等学校美術デザイン科3年）